

いしづち

2025.3

MARCH

No.163



公益社団法人 愛媛県建築士会

Ehime Society of Architects & Building Engineers

<http://www.ehime-shikai.com>



窓
建築パース製作基礎編(3) 3点透視図法
道後温泉の湯釜 湯釜葉師編

1	窓	道上壯/VuA……①
2	自分磨きへの道しるべ 建築パース製作基礎編3) 3点透視図法	松山支部 尾崎 光高……③
3	道後温泉の湯釜 湯釜葉師編	一級建築士 野本 健……⑤ 文化財・まちづくり委員会 委員 花岡 直樹……⑤
4	世界建築紀行 [最終回] 完成間近! サグラダファミリア	西予支部 松山 清……⑬
5	委員会報告 無量寺(今治市朝倉上) 実測調査	文化財・まちづくり委員委員会 副委員長 曾我部 準……⑰
	女性委員会主催見学会報告	
	三津浜地区の良さを感じて…	女性委員会委員 入船 安紀……⑳
	三津浜地区見学会に参加して	女性委員会委員 川崎 陽子……㉒
6	支部報告 令和6年度 一級建築士 設計製図試験対策 実例見学会	四国中央支部 高橋 智洋……㉓
	「高校生の建築甲子園」・「愛媛県内高校生建築競技設計」の作品展示	四国中央支部 高橋 智洋……㉔
	瓦のおはなし会 ～「魅力を伝える努力」の大切さ～	今治支部青年委員会 今井このみ……㉕
	活性化委員会主催 研修バスツアーinかがわ2024	松山支部 中尾 忍……㉖
		(株)日創設計 坂本 龍城……㉖
7	お知らせ 地域貢献活動令和7年度募集要項	事務局……㉗
	令和6年度 第6回理事会概要報告	事務局……㉘

※尚、表紙及び本誌記事の無断転載を禁じます。

透明水彩、紙

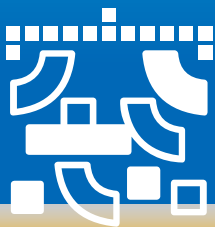
くじょうてんほうだい
題：「具定展望台」 サイズ/F4

日本夜景遺産(2010年)、日本夜景100選(2004年)にも認定された夜景スポット。国道319号線沿いの休憩地にあり、市街地が空の上から見るように眼下に広がります。(具定展望台HPより)



表紙作者 上田 勇一 プロフィール

1974 東京生まれ
1980 小学校から高校まで松山在住
1990 東日本建築教育研究会製図コンクールにて奨励賞
1991 愛媛県内高校生建築競技設計にて会長賞(愛媛県建築士事務所協会主催)
1993 画家・高橋勉氏に師事。約10年間、古典絵画技法全般を学ぶ
1996 日本工業大学建築学科 卒業
1998 画家として活動開始する。東京や埼玉にて毎年個展開催
2002 日本ファンタジーノベル賞受賞作者「世界の果の庭」(新潮社)の装丁担当
2003 美術家の登竜門である昭和会にて優秀賞(東京/日動画廊)
2010 愛媛県美術館に作品「ドライフラワー」收藏される
2015~17 愛媛新聞 冊子アクリート表紙画連載
絵画教室やオリジナルブランド額工房「櫛リチエルカ」を設立
2017 「えひめの塗り絵」を出版
その他、出版装丁画や受賞多数、全国にて個展中心に活動。
現在、現代日本美術会 会員/審査員



僕が窓を意識したのは二十代後半のプランツ時代。東京墨田にあるYKK R&Dセンター(現YKK60ビル)に打合せで行った時のことだ。

サッシの打合せで会議室に入った時、何だか今までとは違った雰囲気を感じた。部屋を見渡して気がついた瞬間、担当者がこう言った。「この部屋って無窓なんですよね…」と。

僕たちは、窓のない内部空間を知らず知らずのうちに体験している。例えば、居酒屋やカラオケボックスその他。隠れ家的な用途の空間は、得てして無窓の内部空間が多い。人知れず秘密裏に、何事かを企んだり楽しんだりする空間には、窓は不要なのかも知れない。

窓の外の風景は、内部空間に多大な影響を与える。隣のビルの薄汚れた外壁の風景と、瀬戸内の島々が広がる海岸の風景とでは、天と地ほどにその魅力は違う。建築はその敷地、いや、窓から見える風景で、パラダイスにも秘密基地にもなれる。窓はそれほどに、内部空間のあり様を支配する。建築や空間が大きくなったことがなくても、外の風景が素敵ならば、建築や空間は何となく素敵に見えてしまう。逆に建築や空間が優れていても、外の風景がお粗末であれば、建築や空間の魅力は半減してしまう。建築にとっては、周辺環境との関わり方も大切な要因の一つなのだ。



僕は窓を考える時、できるだけ機能を限定したいと思っている。光を取り入れる窓。風を取り入れる窓。風景を取り入れる窓。二重三重に機能を重ねると、窓や枠は複雑になり、見付けや奥行き寸法がどんどん大きくなる。壁と開口部の関係はシンプルに構成して、内部空間のあり方に影響を与え過ぎないことを心掛けている。一見シンプルに見える収まりほど、非常に考え込まれたディテールが必要で、部分詳細図が山のように描き込まれた実施設計図になってしまうのが、僕の建築図面の特徴の一つだ。

光を取り入れる窓は、はめ殺しが適している。光が入れば良いので、開閉の必要はなく透明でも半透明でもフィルム貼りでもよい。壁付きの窓でも天井付きのトップライトでも、欄間タイプでも地窓タイプでも、室内に適した光を入れることだけを考えれば良い。その部屋をどんな光の雰囲気にするのかがポイントになってくる。

風を取り入れる窓は、フラッシュで開閉できるものが適している。風が入ってくる方向に開き、風が出てゆく方向に開く。つまり、自然な風の通り道をつくってやる必要がある。光を入れる必要はないので、ガラスではなくメタルや木製のフラッシュで十分だ。遠目では壁の一部に見えながら、窓を開けた時、その部屋にどんな風が流れるのかが大切になってくる。

風景を取り入れる窓は、透明ガラスのはめ殺しが適している。窓の大きさや平面的立面的な位置やそこから見える風景を考える必要がある。内部と外部をどう切り結ぶのか、何を見せて何を見せないのか、内部空間のあり方を決めるだけではなく、外部空間のあり方までも決めてしまう。内部からどんな外部が見えるのか、外部からどんな内部が見えるのか。建築のあり方を左右するとても大切なファクターになってくる。

僕は光と風に関しては一生懸命考えるが、風景に関してはとても無頓着だ。と言うのは、周辺環境は移り変わるものだと思っているからだ。今は錆びた汚いタン屋根が見えていても、ある時、綺麗に手入れされた庭になるかも知れない。今は緑あふれる田んぼの風景でも、ある時、窓もない無機質なマンションの外壁になるかも知れない。周辺環境の変化で、建築の魅力がアップダウンして右往左往してしまう。そんなことに振り回されるよりも、潔くもっと本来あるべき建築の佇まいを考えてゆきたいという思いがある。



SI.House

壁にガラスがそのまま突き刺さっていたら、シンプルでとても綺麗だ。安藤忠雄のサッシュレスなガラス開口部はそんな発想から生まれたものだ。水を打ったような佇まいの床壁天井と開口部。谷口吉生の洗練されたディテールは建築の静けさを追い求めたものだ。共に建築そのもののあり方を模索している。シンプルな両者の建築を僕はそう解釈している。

窓をどこまで考えるか？確認申請でALVSをクリアするサッシをカタログから選ぶ。一番手っ取り早い簡単な方法だ。縦横の大きさ、床との収まり、壁との収まり、天井との収まり、サッシの素材と色、見付け寸法と見込み寸法、ガラスの厚みと種類、コーキングの色、そして、外に広がる風景の取り込み方、内に広がる内観の見せ方。たった一つの窓でも、スタディすべき内容はまだまだ山ほどある。何が正解で、何が最適解かは、意見の分かれるところだろう。だが、一つだけ言える確かなことは、僕たちが考えている以上に、窓は建築にとって魅力を左右する重要なエレメントだと言うことだ。

窓が建築の全てを支配するとは思わない。主役足りうると思わない。だが、内部空間と外部空間を繋ぐ境界であると言った特異性を帯びていることは確かだ。様々な切り結び方で窓は存在している。ガラスが無いように繋ぐものもあれば、光や気配だけを感じさせるものもある。外部に格子があったり、内部にブラインドやカーテンがあったり、透明・半透明・不透明であったり、窓自体は様々なバリエーションで存在している。

今日からは窓を意識して建築を見てみよう。雑誌に掲載されている著名な建築も、誰が設計したのか分からない市井の建築も、窓がどんな風に考えられて、どんな風景が内外を繋いでいるのか。そこから読み取れたことをあなたの建築の窓に活かしてみよう。古くはコルビュジェやミースに、新しくはSANA Aや藤本壮介や平田晃久に辿り着くかも知れない。



TI.House

建築パース制作基礎編3)

3点透視図法

松山支部 尾崎 光高



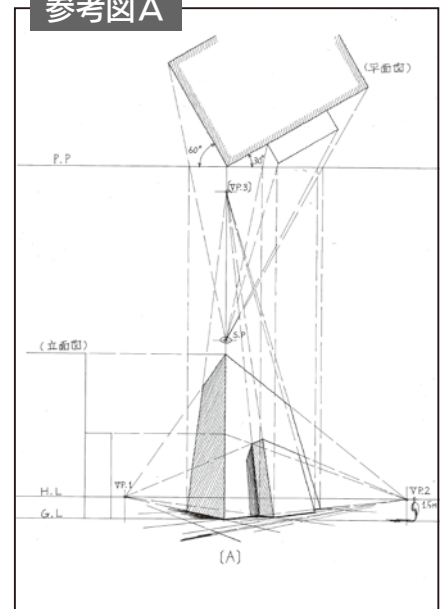
今回は3点透視図法についてご紹介させていただきます。この技法は余り使う事が少ないかもしれませんが。

参考図内共通用語解説

- PP** ピクチャーライン（画面）です。平面図が接しているのので、この位置が実際の建築物の高さとなります。
- SP** スタンディングポイント（人の立ち位置）です。カメラ、スマホで撮影する時の自分の立ち位置、あるいは建築物を見ている位置となります。
- VP** バーニングポイント（焦点又は消失点）です。人が見ている位置と覚えて下さい。
- HL** ホリゾンタルライン（目の高さ）です。このVPとHLは1点透視図の場合、同じ位置となります。1か所しかないので1点透視図と呼ばれています。これらは各技法とも同じです。

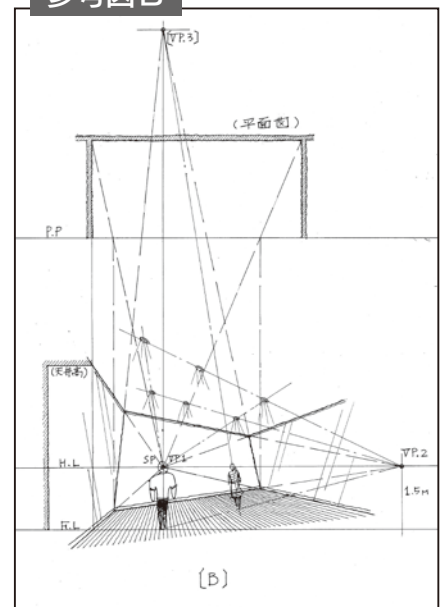
参考図Aから解説していきます。前回の2点透視図と同じく、PPに60°、30°で配置し今回は出っ張り形状としました。次にGL、HLを設定しPPと建物の角の接点からGLまで下して任意の距離でSPを設定します。建物の各角とSPとを補助線で結びPPの交点からGLに下します。そして、HL上にVP1、VP2を任意の距離で設定します。ここからSP線上に任意の距離でVP3を設定しますが、ここが違うところです。VPが3点となるので3点透視図という事です。立面図から高さをSP線に移してVP1、VP2と補助線で結び、PPの交点から下した建物の角補助線と下の補助線との交点を出します。そして、その交点とVP3を結べば建物の形状が出て来ます。出っ張り部分も同じ作業ですがSP線(高さ基準線)から移していくのが基本です。単純に高いビルなどを下から見上げた感じを表現する図法です。私の手法となりますが、今回は影を付けるだけでなく路面を表す線を入れてみました。これもVP1、VP2に結びます。そして、建物の影を足すことによりどっしりと地面に建っている図となりました。前回の図と見比べて頂くとより分かりやすいかと思えます。彩色する時もこの手法を使います。

参考図A



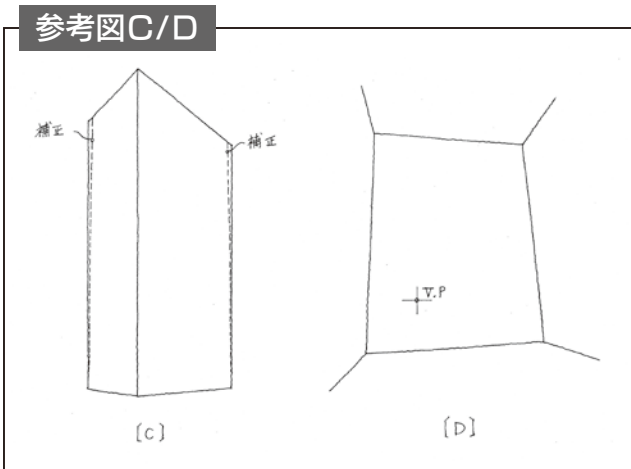
参考図Bは室内パースの例です。作図方法は前回に似せました。まず、PP線上に平面図を設定し、次にFL、HLを下部に設定します。HL線上に任意の位置でSP (VP1) とVP2を取りSP (VP1) 線上にVP3を任意で設定し3点とします。各壁角とSPとを補助線で結びPPとの交点からFLに下します。左壁線が高さ基準となるので、ここに天井位置を設定してVP1と補助線で結べば左壁の床、天井線となります。そして、左壁下床線とPPからの補助線との交点からVP3へ補助線を引いて左壁天井線との交点を出し天井上角の位置を設定します。その床角、天井角とVP2を補助線で結べば奥壁の床、天井線が出来ます。次に、右壁角補助線とPPとの交点から下した線と奥壁床線との交点を取り、そこからVP3とを結んで奥壁天井線との交点が右壁角の天井位置となります。右壁床角、天井角とVP1を結び延長すれば右壁の範囲となります。最後に形取れば完成です。今回、参考として天井にダウンライトを入れてみましたが、これもVP1、VP2からの補助線上となります。人物も同じくVP2に繋がります。私は人を描く場合は女性の表現位で抑えます。CADの場合は添景(人、車、樹木)データを上手く活用されると良いかと思えます。このパースは非常にデフォルメ的に見えますね。外観の場合もそうですがVP2、VP3の距離を倍以上取ると自然な見え方になりますので調整が必要です。その場合はドラフターでは画面に入りきりませんので、下描きはお使いのCADで起こすようにすると良いです。以前、JWW CADで作成した折、画面が広く自由に使える為、便利でした。

参考図B





▲ 3点透視参考例外観 (表参道ヒルズ 安藤 忠雄) (東京)



次に参考図Cは高い建物の場合、垂直線のみとすると目の錯覚で上部の両側が膨らんで見えてくる場合があります。経験上、5階以上となると頭でっかちになります、よって、少し3点透視図的に補正しないと完成後違和感が出て来ます。せっかく描いたものがマイナスイメージになりますので要注意です。その点CADパースは補正し易いかと思います。余談ですが、絵画も目の錯覚を考慮しないといけない場合があるかと思いますが、逆に錯覚を利用したものもありますね。

参考図Dは室内パースで1、2階吹抜となっている例です。これ位が自然かと感じます。デジカメ、スマホで撮影した場合、又はCADで出てくる画はデフォルメ的になる場合がある為、調整が必要です。なるべく人が見ている状態に近い表現にすることが大事です。今回の投稿に間に合いましたので、道後温泉本館を描いた作品を解説してみたいと思います。3点透視図の外観は中々少ないので描いたわけですが、細かな部分の描き込みに適したペン画(モノクロ)としました。昔はロットリングを使っていましたが、最近使いやすい物があります。まず、現地に行きスマホで撮影し、写真をコピーしてトレーシングペーパーでトレースした下描きを更にコピーして用紙に転写してから描き始めます。手描きパースの場合はこの作業があります。正面玄関側からですが、増改築による大きく5棟からなりかなり複雑です。スマホで撮影した為3点透視図感が強めに出ています。下図の段階で所々歪みがある所は補正しながら調整しました。各VPまでの角度調整が必要でした。SPは受付付近の設定です。まずここを抑えます。正面玄関棟から取り掛かり、次に右側の棟、そしてその奥の棟と進めていきます。(これはSPから近い所から進めて遠近感を出す為です。絵画の手法で空気遠近法というのがあり、パースでも利用します)左側棟の後3階建て部分、太鼓櫓、天辺の白鷺を描いて最後に3階建て前の平屋部分を描き、フェンス、人力車、樹木、路面を描いて完成です。5棟ありますので微妙にペンの太さも替えています。影の付け方で立体感を出します。又、路面の石畳部分は線遠近法という手法で手前を濃く太くして奥行感を出しています。両側の樹木は目線が奥に抜けて行かない為と、主役の建物に集まるようにする目的ですね。長い歴史による重み、風格が出せたかな?今後、実践編では様々な手法を紹介していきたいと思っています。

改めて細部の造りを細かく写真に撮り製作していると、木造建築の奥深い工法が理解出来、何か今後の参考になりそうです。三斗組、二重垂木、扇垂木工法等先人の知恵からヒントを得て、木造に限らずに新しい工法に繋がりそうです。今般、木造建築も見直されて大規模建築も建てられています。木材を外部で採用する場合は風雨対策を十分にしておかないと駄目だと改めて考えさせられました。それも建築に携わる者の使命かと感じております。古い建物を描くきっかけとして、恩師である、故犬伏武彦先生との雑談の中でこれから古民家等のパースを描いていきたいという話を、すでに20数年経ちましたがやっと始まっていくかなという思いです。パースを描く上である程度構造的な分野も勉強しなくてはならないのですが、やはり建築が好きなのか楽しめます。



▲ 3点透視参考例) 道後温泉本館の外観

次回は鳥瞰図等などのご紹介をして参ります。尚、建築士会HPよりカラー版が閲覧できますので是非ご覧下さい。宜しくお願い致します。

道後温泉の湯釜 湯釜薬師編

執筆： 一級建築士 野本 健

監修：文化財・まちづくり委員会 委員 花岡 直樹



▲湯釜薬師（道後公園）

<おことわり>

以下記載内容は、現在の収集できた文献から総合的に判断した内容を記載している。そのため、調査状況により新たな知見が得られた場合、記載内容に訂正の必要が生じる可能性はある。

<謝辞>

柚山 俊夫様【伊予史談会】

～解説及び助言

石岡 ひとみ様【愛媛県専門学芸員】

～助言

はじめ

令和6年9月16日から11月4日まで愛媛県美術館の特別展として「道後温泉ものがたり」を開催した。展覧会は道後にまつわる伝承や歴史的経緯を示す資料、保存修理工事中に愛媛県美術館が協力した美術品調査によって見出された道後温泉本館伝来の品々を紹介する展示であった。



▲原寸大の湯釜

この展示の一番注目を集めたのが原寸大の湯釜であった。湯釜とは道後温泉独自の温泉を出す彫刻物であり、古くは奈良時代から使用されていると言われている。観覧客からは湯釜とはこんなに大きいものなのかと改めて大きさを実感されている人が多かった。

展覧会ではこの湯釜の所在等を記した解説板を用意した。この解説板と原寸大の湯釜を見た人々から、「この湯釜に彫られている文字はどのような意味なのか」という質問を投げかけられた。私自身、湯釜に彫られている文字は古い文字であり、解読ができない。しかし、この「道後温泉ものがたり」の展覧会や関連本の「道後温泉本館保存修理工事 総集編」で多くの人脈を築き上げることができた。この訳文や意味を考察できるのは自分しかない、そういう思いから最後の筆を執った次第である。



▲湯釜薬師（道後公園）

正面に薬師如来の尊像を彫った湯釜薬師（文化財名称は石造湯釜）（直径166.7cm、高さ157.6cm）は、天平勝宝年間（749～757）に作られたと伝えられ、正応元年（1288）に河野通有の依頼で、一遍上人が宝珠に「南無阿弥陀仏」を、享禄4年（1531）に天徳寺の徳応禅師撰文の温泉記を彫らせたと言われている。

昭和29年（1954）に愛媛県の指定有形文化財（石造物）に指定され、道後公園の北口に展示されている。

なむあみだぶつ

【宝珠】南無阿弥陀仏 【訳文】阿弥陀如来にすべてをゆだねます

【西園寺源透「石槽銘文」大正15年7月筆写】

夫吾朝 伊豫之 国守
 河野太 郎通直 有道
 徳行兼 備詩禪 文共
 熟仁謂 之仁者 □□
 孝靈天 皇幸也 □□
 伊豫親 王從焉 也御
 座側有 一湯永 □□
 地也洗 □□□ □□

成醫豈 異于他 □清
 宮乎于 時有□ □□
 如意宝 珠以石 □御
 湯莊嚴 將謂□ 命不
 外□局 也盛哉 □□
 願主柳原左 衛門尉□次 □□
 大工備後尾 道芥河□□ □重
 享禄四天 辛卯小春如意 珠日

【伊佐庭如矢『道後温泉誌略』明治34年の湯釜刻字原文】

夫吾朝伊豫之國古號二名洲亦扶桑國奉勅命大物部
主伊與大連以降連綿而治斯國河野太郎通直者出自
大日靈貴與大山積二神之孫而饒速日尊之後也
世々此國之守護德行兼備詩禪英將也蒼生民撫育加
慈悲非凡人也城館北有温泉上古以降湧沸不絶矣熟
仁田謂之仁就田三津名日石湯亦磯湯上古大己貴少
彥名巡斯國初浴灌也後 孝靈天皇幸也妃細媛皇女
倭迹々日百襲比子狹嶋媛皇孫大小市○○○○伊豫
親王從焉後景行帝幸也八坂入姫從焉又仲哀帝幸也
息長帶媛從焉○○坐側有一湯玉碑聖德太子之浴也
釋惠聰葛城臣等從焉立碑之○○○地也洗浸聖闕躬

無不靈驗則玉顏無不喜既舒明齊明二帝巡也成磬豈
遙凌波濤 天智天武爲太子諸王從焉鳳輿巡幸総七
帝廿八○○○宮年于時有白鳳十三冬十月地大震沸
湯塞忽竭國司玉興鑿池如故○○○如意寶珠似名臣
聞鴻荒之世有扶桑大樹柱此鄰其埋木堀造○○○○
○湯莊最嚴將謁延施主國司乎智宿禰玉興與行基律
師力而湯幹改築矣號外藥局也盛哉天平勝寶元己丑
天十一月吉辰亨祿四天辛卯小春如意吉辰修覆多幸
山彌勒院天德禪寺德應亨撰書備后國尾之道芥川住
石大工 柳原左衛門尉道資彫刻

※太字は石槽銘文と重なる箇所を明記している。

【訳文】

さて、我が国の伊予の国は、その昔、二名洲ふたなのくに
また扶桑国と呼ばれた。天皇の御命令により、
大物部主であった伊予大連ののち、連綿と続
いてこの国を治めてきた。

河野太郎通直は、その出自は大日靈貴（天
照大御神）と大山積の御二柱の神様の子孫で
あって、饒速日尊の末裔である。長くこの伊
予国の国守として徳を行い、仏教哲理を極め
詩情豊かな文人の才を兼ね備えたすぐれた武
将であった。人々をかわいがって大切に、慈
悲を加え、凡人ではなかった。彼の城館の北
に温泉があった。温泉は古くから湧き出てい
て絶えることがなかった。

「熟仁田」の名は「仁就田」のことをいい、三

津を名付けて「石湯」また「磯湯」と呼んだ。
大昔、大己貴と少彦名はこの国をめぐり、初
めて温泉に入った。そののち孝靈天皇が行幸
され、妃（皇后）の細媛皇女、倭迹々日百襲比
子狹嶋媛（孝靈皇女）、皇孫大小市【字不明】
伊予親王が同行なされた。

そののち景行天皇が行幸され、八坂入姫が
同行なされた。また仲哀天皇が行幸され、息
長帯媛が同行なされた。【字不明】一ノ湯の
座ったそばに、「玉碑」があり、聖徳太子が御
入浴された。僧侶の惠聰と葛城臣らが従って
碑が立てられた。【字不明】の土地である。貴
人たちが居られた屋敷を洗い流し、靈驗が途
絶えることがないのでお喜びにならないことは
ない。すでに舒明天皇と齊明天皇も巡幸され

た。石の楽器を鳴らして、はるか彼方から波を渡って来られたことをお祝いした。後の天智天皇や天武天皇は太子であった。諸王が同行なされた。天皇による御巡幸はすべて七帝二十八【字不明】天皇が宮に居られた白鳳十三年の冬十月に大地震があつて湯の湧出が途絶えた。国司であった玉興は池を掘って今までのように温泉が湧き出るよう【字不明】宝珠は名臣に似て広く世に著名であった。

扶桑大樹の柱はこの地にあつたので、その埋もれ木を掘って造つた【字不明】(湯莊最嚴

將謁延…意味不明)

施主である国司の越智宿禰玉興と行基律師は努めて湯の根幹を改築し「外薬局」と呼ばれた。盛大なり、天平勝寶元年己丑の年(749年)十一月吉日のことであつた。

享祿四年辛卯の年(1531)十月吉日に修復した。

多幸山^{みろく}彌勒院天徳^{とくおう}禪寺の僧徳應が書いた。

備後邦尾道の芥川に住む石大工の柳原左衛門尉道資^{さえ}が彫刻した。

【考察0：はじめに】

湯釜薬師の文章の訳文や考察は誰も検証したことがないため、読者には訳の一例として示しており、手直しが必要な可能性は大いにある。そのため諸賢のご指摘を待つことを最初に断っておきたい。

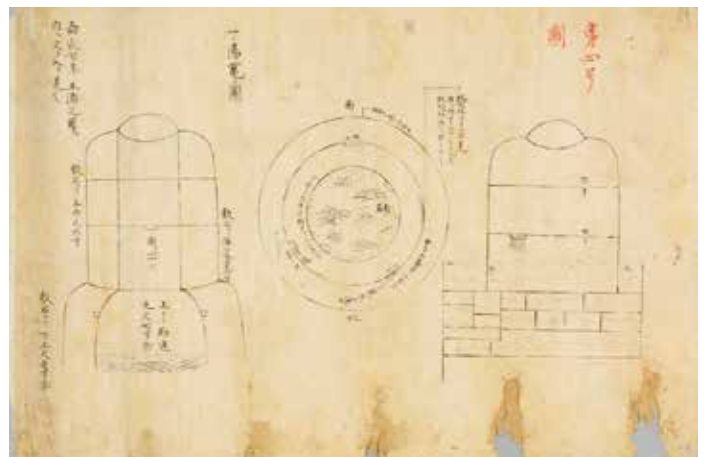
【考察1：道後温泉誌と湯釜の刻印】

湯釜薬師の文章で興味深い点は湯釜に刻印された文章と伊佐庭如矢が記した『道後温泉誌略』の内容と異なる点である。また、『道後温泉誌略』は明治34年(1901)の初代道後湯之町町長である伊佐庭如矢執筆から始まり、『道後温泉誌』として何度か改訂版が出版され、大正15年(1926)に伊佐庭如矢が記述した湯釜薬師の文章が削除されるのであつた。それは現在、道後公園に鎮座する湯釜薬師の胴回りの刻印と異なる表現であつたため削除した可能性が高いものと考えられる。

明治27年(1894)以前、湯釜薬師は道後温泉の一ノ湯で使用され、その後、振鷲園に移され、昭

和25年に道後公園に鎮座するのであつた。

明治27年(1894)前後で異なる点は、湯口が付いた胴回りの存在のありなしである。嘉永7年(1854)の絵図には湯口の存在が確認でき、振鷲園に移された明治27年には湯口の存在が確認できない。『道後温泉と伊佐庭如矢』(阿部里雪)より明治27年(1894)以降は湯口が付いた胴回りは又新殿の北庭に移されと言われている。現在では上部の胴回りしか見ることができないが、もしかすると下の部分には伊佐庭如矢が記した漢文の部分が存在するかもしれない。以下の考察は伊佐庭如矢が記した『道後温泉誌略』から考察した文章となる。



▲一ノ湯釜ノ図 嘉永七年

道後温泉の湯釜 湯釜薬師編

【考察2：河野氏について】

湯釜薬師の文章を参照すると、749年の11月に国司である河野伊予守越智宿祢玉興と行基が温泉場を改築し「外薬局」を建設したと記載されている。

玉興は河野玉澄（伊予河野氏初代当主）の兄と伝えられており、湯釜薬師が天平勝宝年間（749～757）に造られたと言われるのはこの文章から推測したものと考えられる。

その後、湯釜薬師の文章に登場するのが河野通直（伊予河野氏36代当主）（1500—1572）であり、文章を参照すると、河野通直を天照大御神と大山積神の子孫であり饒速日尊の末裔と書き、神々の子孫で縁深い関係であると河野氏を驚く程、持ち上げている。

享禄4年（1531）に修復したという記述、河野氏を持ち上げている点から、この文章は1531～1572年頃の室町時代に刻まれたものと考えられる。また、河野氏と縁深い天徳寺の徳應に書かせたという記述から、信憑性を増す文章としている点も面白い。

徳應（正字）は現在では徳応（略字）と書かれ、

【考察3：皇室の来浴歴】

湯釜薬師の文章で興味深い点は皇室関係者の来浴歴である。

『道後温泉誌』は景行天皇と八坂入姫の行幸啓から始まり、孝霊天皇と妃の細媛皇女が行幸啓、倭迹々日百襲比子狭嶋媛、皇孫大小市、伊予親王が同行したという記述は記載されていない。

『道後温泉誌』に記載されている皇室関係者の来浴歴は『伊予国風土記』から引用しているため、孝霊天皇等の来浴歴は記載しなかったものと考えられる。



▲湯釜薬師（振鷲園）（提供：二神 将）



▲湯釜薬師湯口部分（又新殿北庭）

『名藍天徳寺由来記』を執筆した天徳九世主郭融室の法嗣である。

（『伊予天徳寺 千四百年の歴史』田中 弘道より参照）



▲湯築城（長谷川竹友）

【考察4：湯玉】

『伊予国風土記』には、大国主命と少彦名命が伊予の国に来た際、重病にかかった少彦名命を大国主命が掌にのせて道後温泉の湯であたためたところ、たちまち元気になり、石の上で踊ったと記されている。道後温泉本館の北側に鎮座する「玉の石」はその石であると昔より伝えられている。

道後温泉にはいつからか「湯玉」というフレーズが存在した。道後に住む人々は、道後のシンボルマークを「湯玉」と呼称していたが、文献としての呼称の存在は確認できていなかった。

しかし、今回参考にした『道後温泉誌略』と湯釜薬師より「一湯玉碑」という単語が確認できた。一ノ湯の側にあった記述から現在の「玉の石」のことを指しているものと考えられる。

この文章より、いつしか「湯玉」というワードが道後温泉に住む人々に浸透し、口伝として今に至るものと推測される。

【考察5：各時代の観光】

『道後温泉誌略』を執筆した伊佐庭如矢について少しだけ紹介したい。

伊佐庭如矢は江戸時代、松山藩の家老の家司として働き、明治時代以降は愛媛県職員として寺社仏閣の分野を担当した。その後、高松中学校の校長、金比羅宮の禰宜を歴任し、明治23年(1890)の61の時に初代道後湯之町町長に就任し、道後温泉本館の養生湯(南棟の前身)、神の湯本館、又新殿・霊の湯棟の建設を行い、明治40年(1907)の時に80歳で永眠するのであった。

彼は寺社仏閣の知識に精通し、国学・漢学に秀でた人物であったと言われている。

彼の功績は松山城を残したこと、道後温泉本館



▲大国主命と少彦名命(長谷川竹友)



▲玉の石

を作ったこと、道後公園を整備したこと、道後温泉まで電車を引っ張ってきたことなど、多くの偉業を成し遂げていることで有名である。

しかし、彼が国学や漢学に精通していることは全くと言っていいほど取り上げられていない。彼が執筆した『道後温泉誌略』はその偉業の1つである。この本が執筆されるまで道後温泉という歴史がまとめられた近代的な書籍は存在していなかった。

伊佐庭如矢は道後温泉という歴史をどのように伝えるべきか苦心したに違いない。道後温泉に関する資料や口伝は多くあるものの、1つの本とした時に矛盾の少ない物、多くの人々に興味を持ってもらい、道後湯

道後温泉の湯釜 湯釜薬師編

之町を散策できる今でいう観光ガイドブックの製作に苦慮したことが見え隠れしてくる。

さて、湯釜薬師の文章は当時の城主である河野氏と皇室の来浴歴を記載している。この文章は当時の観光業という観点から見ると大変興味深い。室町時代において当時の道後湯築城主と皇室で観光客を呼び込もうとしていたことを伺い知れる点である。

次に伊佐庭如矢が道後温泉に関わる時代であるが、基本的に松山藩主であった松平家を持ち上げる時代へと変わる。これは伊佐庭如矢自身が伊予国松山藩の松平家に仕えていたことが大きな要因と考えられる。

中央廊下にある側石（明治27年建設当時は一ノ湯で使用されていた）には、道後温泉本館の原型を作ったのが松平家と言い、神の湯東側浴室の宝珠に浮彫された「真躰寝哉」という文書を松平勝成（伊予国松山藩代13代・15代藩主）に依頼するなど松平家推しにしている。

そして『道後温泉誌略』では引き続き、皇室の来浴歴を掲載し、道後温泉を松山藩の城主であった松平家が関わりを持ち、皇室来浴の歴史を持つ非常に格式高い温泉地としてイメージを刷新し、観光客を引き込もうと考えていた点は大変興味深いものである。明治36年（1903）に皇太子（大正天皇）が御来浴された際は『道後温泉誌』を献上している。

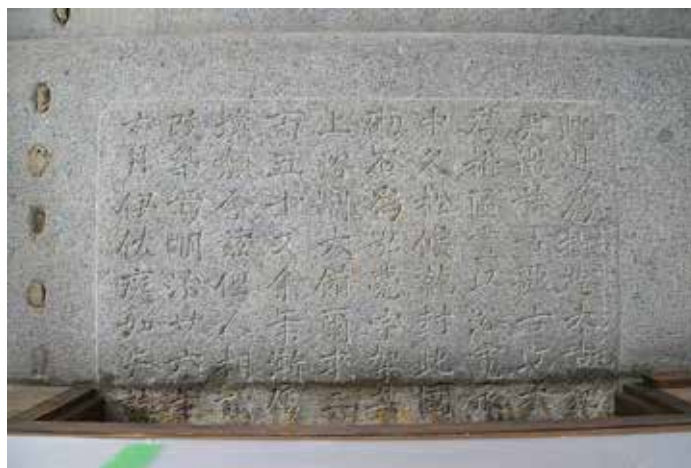
【考察6：湯釜の存在】

この歴史探訪で大変驚かされたことは湯釜がいつからあったかということである。

湯釜の存在が絵図として確認できるのは正保伊予国絵図である。正保年間（1644～1648）で



▲伊佐庭如矢



▲伊佐庭如矢が記した中央廊下の側石



▲道後温泉 松平家の時代（長谷川竹友）

あり、この絵図の石手寺の側に湯釜の存在が確認できる。

次に奈良時代から存在したという記述であるが、この記述は『道後温泉誌略』にしか存在しない。また、享禄4年（1531）に修復した記述はこの湯釜薬師の文章でしか確認できない。

そのため、享禄4年（1531）以前の湯釜の存在は『道後温泉誌略』のみの記述であるため、一体いつから湯釜があったかはこの湯釜の文章と『道後温泉誌略』に頼るのみである。

■まとめ

湯釜薬師の文章は実際の刻印と『道後温泉誌略』で記述が異なる点が大変興味深かった。

刻印の量や内容は異なるものの、共通して当時の城主や皇室の来浴歴を記述し、それを基に観光客を呼び込もうとしていた点は各時代の観光業の観点からも注目すべき内容である。

また、河野氏を神の子孫として称える文章を刻印したり、松平家から揮毫を賜うなど、各時代の城主の偉功を湯釜に遺そうとするなど、湯釜を神

仏に近い存在へと祭り上げる行為も大変興味深いものである。

大正15年（1926）以降の『道後温泉誌』においては皇室の来浴歴について孝霊天皇等は削除し、都合の良い部分だけ引用している点も非常に面白い。

現在の道後温泉の歴史は『道後温泉 増補版』が主流となっているが、その源流となっているのが『道後温泉誌』であるため、現在に伝わる道後温泉の歴史の体系化を行ったのが伊佐庭如矢であると言っても過言でないと思われる。

享禄4年（1531）以前の湯釜の存在は『道後温泉誌略』のみの記述である。この事実から、もしかすると現代の私たちは伊佐庭如矢が執筆した道後温泉の歴史という波に泳がされているだけなのかもしれない。そういった観点からもこの道後温泉の歴史を紐解いていくのは大変面白い作業と思われる。

（続く）

■参考文献

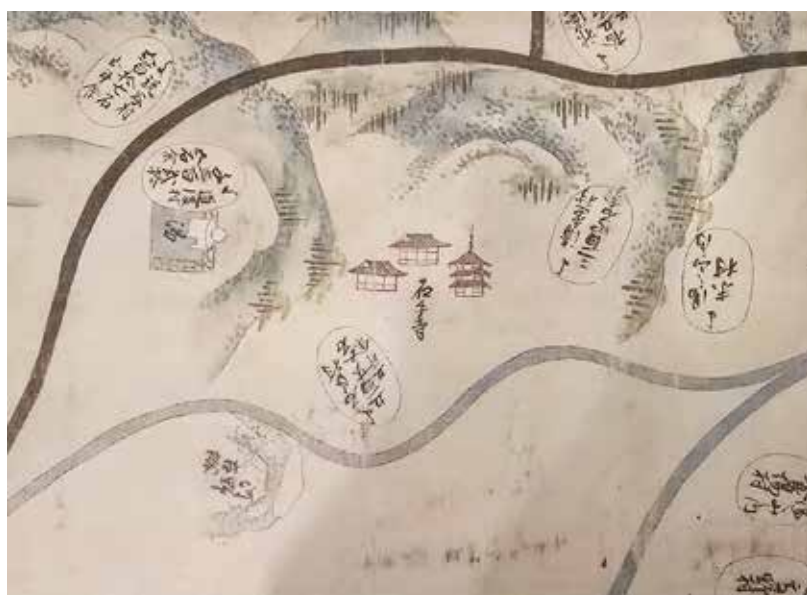
「道後温泉誌」

「道後温泉誌 略」

「伊予天徳寺 千四百年の歴史」

「道後温泉 増補版」

* 本書掲載の文章・図版の無断複製・転載を禁じます。



▲ 正保伊予国絵図（愛媛県歴史文化博物館）

1 建築を巡る旅

世界建築紀行の最初はバルセロナ訪問記を5年前に起稿し、それ以来今回で30回目、時の流れの早さに驚くばかりだ。この紀行のお陰で当初予定していた以上に、世界の建築を巡る機会が増えたのは間違いない。モチベーションがあれば時間と費用はなんとかなるものだ。



▲ 完成模型

ガウディ没後100年に当たる2026年にサグラダファミリアが完成するという噂が聞かれるようになり、旅行記読者と同行してバルセロナのガウディ建築をはじめとする世界遺産を2024年11月に再び尋ねた。その備忘録を最後に、ペンを置きたい。

今回はいつもの個人旅行ではなく11人のグループ旅行だったので、松山市のM社に添乗をお願いした。見学するガウディ建築など事細かにチョイスして行程表にもきちんと書かれているにも関わらず、実際には全く違うスケジュールが現地には伝わっており、海外研修の難しさを味わうことになった。

松山空港を出発する時「サグラダファミリアの生誕のファサードからE Vで屋上まで昇りますよね？」と確認すると、「昇ります！」と添乗員は答えたが、現地ではそのチケットが手配されていなかった。完成間近のイエスの塔の工事状況を見たかったが、それが達成されず落胆した。それも含めて旅なのかもしれないが、旅行社の責任感の希薄さなのか、信頼関係の維持に気を遣うこととなった。

2 バルセロナへ

バルセロナには9つの世界遺産建築があり、そのうち7つがガウディによるもので、サグラダファミリア、グ



▲ 工事中のイエスの塔先端部

エル公園、カサ・パトリョ、カサ・ミラ、カサ・ビセンス、グエル邸、コロニアグエル教会。残り2つはモンタネールによるカタルーニャ音楽堂とサン・パウ病院で、それらを見るのが今回の旅の目的だ。さらにスペイン新幹線でマドリードまで鉄旅をして、スペインの至宝プラド美術館のベラスケス、エル・グレコ、ゴヤ、ルーベンスとマリア王妃芸術センターのゲルニカなどのピカソ作品、ミロを鑑賞。そしてトレドの世界遺産の街並みへ向かう計画だ。

バルセロナへは日本からの直行便がないため、フランクフルトまでANAで行き、ルフトハンザ航空でバルセロナへと乗り継いだ。到着は深夜となるが、翌日早くからコロニアグエル教会の観光が始まる。ホテルは空港近くで、市内からは少し遠かった。

11月1日(金)出発、午後の仕事を済ませて松山空港へ向かう。松山ICまでの高速道路は雨が強く、しかも薄暗くなり運転もしづらい。この雨が今回の旅をなんとなく占っていたのかもしれない。

11月2日(土)朝は羽田空港でグローバルwifiを受け取って全員集合。搭乗ゲートで記念撮影をしてそのまま飛行機に乗り込んだ。羽田からフランクフルトまでの飛行時間は、北米大陸の北極海側を西から東へと飛行するため14時間もかかった。降機してから入国審査と手荷物検査を行い、ターミナルAのラウンジに入った。同行者のお姉さんと雑談したが、60代前半の私より10歳年長らしい。それでスペインまでの旅に行くとは、その気力と前向きな行動に脱帽した。

夜遅く23時を過ぎる頃バルセロナ空港に到着。国内線移動扱いなので、手荷物をピックアップして搭乗待合室に出ると、ガイドさんが待っていてバスまで案内された。ホテルまでの移動は15分程であるが、スーツケースなどがあるため大型バスだ。早く就寝したい気分だが、シャワーを浴びて荷物を整理したら、ベッドに入ったのは深夜2時を回っていた。

3 バルセロナの建築巡り

3-① コロニアグエル教会

11月3日(日)8:40出発。天気はあまり良くないが、現地ガイドと合流して郊外のコロニアグエル教会へ向かう。

前回来たときはコロニアグエルまで列車で行ったのだが、今回は教会近くの駐車場までバスで行けた。丘の上から少し下るような感じでコロニアグエルの町を



▲コロニアグエルの街並み



▲ガウディ像

歩く。コロニアグエルはグエルが紡績事業のために作った町で、広場に出てから教会はすぐ近くだった。ガウディ像の前でガイドが入場券を買いに行くのを待ち、地下教会へ入った。コロニアグエル教会は地上階はない。ガウディがサグラダファミリアの建設に専念するため、地上部は建設されないままとなってしまった。ファサードは人が口を開けて何か叫んでいるような入口左右の外壁が特徴で、異次元さを感じさせる。中に入ると、上部構造を支える予定の柱の傾きと梁の骨格が、逆さ吊り模型から得られた力学上の解を表してい



▲地下教会入口



▲地下教会祭壇と天井

る。ちょうど教会内ではミサをやっていて、内部を一回り見て地上へ上がると、平らな1階床部分には小雨が降っていた。



▲地上部分



▲ミース・ファンデル・ローエ記念館

ミース・ファンデル・ローエはドイツ出身のドイツ出身のモダニズム建築家で、1929年バルセロナ万博にドイツ館としてこの建物を完成させている。一旦は取り壊され



▲ミース館内部

たが、1989年に復元され、今では建築家の卵たちの聖地となっていた。この建物を見たとき、私はシカゴのファンズ・ワース邸が頭の中に思い浮かんだ。それはユニバーサル・スペースという考え方で1951年完成のファンズ・ワース邸に繋がっている。Less is more. (簡潔さと明快さが良いデザインに繋がる)というミースの言葉を実践した設計で、この記念館を見てシカゴのファンズ・ワース邸へも行ってみたいと思ったのだった。同行者からは何故ここへ入場するのか、という質問も出たが、バウハウスの歴史とミースの生涯などを詳しく説明してその意義を伝えた。

3-② ミース・ファンデル・ローエ記念館

市内へ帰って中心部南西のモンジェイックの丘から市街地全景と地中海を一望し、記念写真を撮った。カタルーニャ美術館の前だったが、入場はしなくて写真を撮ったのみ。初めてバルセロナへ来た観光客はこの丘からサグラダファミリアは遠望できるし、1929年のバルセロナ万博の時に造られた建物がカタルーニャ美術館となっていて外観はたいそう立派なため、丘を引き立てているのに感激するに違いない。その展示は見ずに麓にあるミース・ファンデル・ローエ記念館を見学する予定だったが、出発時に空港で渡されたしおりでは美術館は見てミース館には立ち寄らない行程が示されていた。旅の内容が勝手に書き換えられ、他にも見学予定だったカサ・ミラ、カサ・パトリヨの入場もカットされ、その代わりに美術館の入場とランブラス通り散策、市場巡りなどに行く計画になっている。半年以上前から行く場所については協議しているのに、格安パックのコースに置き換えられた気分だった。

3-③ サグラダファミリア

食事をしてサグラダファミリア入場。EVで屋根の上に登る計画だったが、現地ガイドによれば屋上まで行く切符にはなっていないと言う。



松山空港で念を入 ▲西側正面入口、栄光のファサード完成模型れて確認した時には、EVは手配済みと旅行社は自信を持って答えていたのに現実はずう。また、事前に送られてきた行程表と松山空港で渡された行程表が違っていて、カサ・ミラ、カサ・パトリヨが車窓観光になっている。つまり、バスで通るだけ？安くない旅行代金を支払っているのに、かなりぞんざいに扱われている、という印象で不信が募る。添乗員とガイドに再交渉をお願いして結果的には入場できたのだが、そこへ行ったからこそ来た価値があるというものだ。一方、今回の



ようなオーダーメイドの旅は、コロナ禍以降の旅行業界の不況のため成立が難しいのは確かだ。航空運賃やホテル代の値上げはもとより、旅行社の地方からの撤退と店舗の閉鎖が続いている。例えばJ社の場合オプション付きパック旅行の販売は松山で対応するが、企画旅行となると東京の本社と打合せする必要がある、それに対してはあまり積極的でない。今の時代、ネットですべて完結させることが人件費削減にもなるため、それが旅の未来の姿なのだ。



▲西側正面の現況



▲未完成の西側正面入口内部

サグラダファミリアのイエスの塔は、頂部の星マークを残すのみとなっており完成が近いと感じさせたが、西側正面入口は以前のまま。ここは栄光のファサードという林のようなオブジェが計画されていて、そこまであと2年で完成するのは疑問に思われた。しかし、イエスの塔を含め最近完成したマリアの塔、福音書家の塔などはPC構法で造られているため、工場で作られたコンクリートブロックを現場では取り付けるだけになっている。そのため、建設工事は市民が



▲カサ・バトリョ

思っているよりも早く進んでいくのだそうだ。内部は未完成とは思えないような仕上がりで、これが途中段階とどれだけの人が気づくかと思った。



▲カサ・ミラ

3-④ カサ・バトリョとカサ・ミラ

カサ・バトリョは個性が際立つデザインのため見学者も前回より格段に多く、特に若者が目立った。階段で内部を登りも下りするので年配者には不向き。地下ではガウディ作品の歴史的偉業のイメージ映像が新しく体験できるようになっていた。

その後、グラシア通りを歩いてカサ・ミラへ行ったのだが、暗くなってから行ったので屋上はやや薄暗く、音声ガイドを聞きながら見学した。夕食はバルセロナ港辺りのレストランでパエリアをいただき、地中海の気分を味わった。いつも海外へ行くと食事が合わなくて苦勞するが、バルセロナは少し安心できる。



▲カサ・ミラ屋根裏部屋



▲カサ・ミラ屋上

3-⑤ サン・パウ病院とグエル公園

11月4日(月)グエル公園へ向かった。サグラダファミリアとサン・パウ病院、グエル公園は近くにあるので、まずモンタネールが手がけた世界遺産サン・パウ病院に立ち寄った。午前8時ホテル出発。天気はやや雨が降っているようで、今回は天気に恵まれていない。スペインまで来たのでアルファンブラ宮殿を見たいというグループは空港へと向かったが、豪雨とそれによる混雑の影響でいくことができなかった。この時はスペイン大洪水が発生し、少なからずバルセロナも巻き込まれていた。空港ターミナルビルも内水氾濫を起こし、レストランも水浸しになったらしい。自然災害のため止むを得ないがその心構えも大切だと再認識。



▲サン・パウ病院



▲グエル公園入口



▲グエル公園テラスベンチ



▲回廊



▲テラスからの展望



▲シンボルのトカゲ

一方、バルセロナに残った人たちはホテルを出発したものの、少し雨足が強くなっていく感じがしていた。途中本降りになったような時間帯もあったが、サン・パウ病院へ立ち寄った時は、雨も上がり見学してグエル公園へ向かった。バス駐車場が公園上方向だったので、入場してすぐにテラスの有名なモザイクタイル貼りベンチへ行き、後はテラス下のドームの中を通りトカゲ像まで行く。このトカゲは雨水を口から流し出している、一番のお気に入りなのだ。記念に公式ショップで大きなトカゲの置物を購入した。短い買い物の時間だったが、雲行きが怪しくなってきた。

3-⑥ カサ・ビセンス

グエル公園のテラスからバルセロナの空模様を見てみると怪しい雲に覆われていて、次の予定のモンセラットは山間部なのでガイドは天気を気にしていた。予報では警報級の雨らしく市内に留まる方が安全だろうということになり、カサ・ビセンスの予約を入れてもらった。ガウディの処女作で世界遺産、建築主がタイル業者だったのでタイルが多く使われたネオ・アルハンブラ様式の建物だ。屋上を見学していた頃から雨が本降りとなり、雨脚が強くなっていく。車に向かって歩く時には道路全体が川のように降った雨が流れ、もう靴の中までビショビショになってしまった。現地旅行社からモンセラットへは土砂崩れのために行くなという指示も出たこともあり、もう一つのモンタネールの世界遺産カタルーニャ音楽堂を見学。美しいステンドグラスの大きなシャンデリアなど内部を間近から見学出来た。

その後は、FCバルセロナの公式ショップがかねてより行って見たかったスペイン広場の闘牛場を改修したラス・アレナスにあるというので行ったのだが、国レベルの洪水警報が出たため店員も帰宅させたそう。しかし、闘牛場の外観を残したショッピングモールは建築的にも奇抜なプランで、アリーナを横切る長いエス



▲カサ・ビセンス



▲屋上煙突



▲カタルーニャ音楽堂



▲ラス・アレナス



▲グエル邸

カレーターに驚かされた。翌日はグエル邸に立寄り、レイアル広場のガウディの作品であるガス灯をみてマドリッドに向かった。これでバルセロナの9つの世界遺産をすべて見たことになる。



▲ガス灯

4 マドリッド

11月5日(火)には新幹線で移動してプラド美術館を見学、翌日は世界遺産トレドの旧市街を訪ねた。街を囲むようにタホ川が流れ、まるで自然の要塞都市のようで、16世紀で歩みを止めた街を体験した。マドリッド市内ではソフィア王妃芸術センターで、小6の図画工作の教科書で衝撃をうけたゲルニカを見て、夜はフラメンコなどスペインの文化に触れることができた。



▲タホ川に囲まれたトレド



▲ゲルニカ

5 世界建築紀行の夢

現在に先人が残した世界の建築は、多くの学ぶべき事を語り続けている。それを今の現役建築士が見に行くヒントになれば、というのが私の願いだ。是非とも勇気を持って訪ねて欲しいし、何かを発見していただきたい。それと同時にこの時間は私にとって財産であったと思えるし、喜びでもあったかも知れない。

無量寺（今治市朝倉上）実測調査

文化財・まちづくり委員委員会 副委員長 曾我部 準

去る12月21日(土)に今治市朝倉上の無量寺の客殿ならびに旧本堂の実測調査をしました。現地は今治から丹原へ抜ける周越農道の途中からさらに玉川へ抜ける県道154号線を2kmほど入ったところの右手、県道から1本入った道沿いの石垣の上に、白く長い大和塀と大きな銀杏が見えます。

境内には東隅の石段を上がりアプローチしますが、現在では南隅のスロープより車で入ることが多いようです。門を入れて左に向かうとその左手に鐘楼、右手手前から庫裡、客殿、旧本堂があります。一番奥には平成16年に竣工した本堂があり、その裏手には納骨堂が渡り廊下を介して客殿と繋がっています。建物はおおよそ南東に向かって配置されています。

■来歴

創建は飛鳥時代で660年頃、斉明天皇の勅願寺として現在の場所より少し奥の堂ヶ鳴地区にありましたが、17代住職宥實上人の代（1580年代）に現在の水ノ上地区（朝倉上）に移転してきたとのこと。現在の宥尚ご住職で36代目となり、本堂と客殿は築約350年と伝えられています。先々代のご住職宥雄上人が書き残された「寺歴私考」があり、読み込めばさらに詳しく解明できると思っています。また写真も多く残されていました。



■旧本堂

間口3間、奥行4間に内陣の裏が半間張り出した妻入りの入母屋屋根で、向拝には奥行1間半の唐破風が設けられています。ご住職の話では建立当初は方3間の宝形だったのを1間の外陣を増築し、その際に屋根も現在の形に葺き替えたとのこと、軒桁の途中に1間程異なる状態のものが入っていたり、外陣と内陣で墓股の意匠が異なっていることからそのことが窺えます。白石委員が小屋裏を調査してみました。棟札らしきものは見当たらず、棟札からは創建、改修歴は判別できませんでした。右上の画像は、縁石を計る酒井委員と破風を計る白石委員です。



▲大師堂調査状況▲



▲大師堂正面全景



▲大師堂小屋組 中央継ぎ手左から増築と思われる

■客殿

現在は間口8間奥行4間平入の瓦葺入母屋造りですが、建立当初は茅葺でした。茅葺屋根とわかる写真も多く残っています。先代の宥仁住職によると高知の茅で葺き替えていましたが、調達がままならなくなり稲藁で葺き替わりもしたとのこと。ところが稲わらは脱穀の段階で繊維が裂けて防水性が悪いため、昭和36年に瓦に葺き替えたそうです。その際に主屋部分の梁桁をかさ上げし入母屋の屋根にするとともに正面側の廊下を半間広げて1間とし、下屋を設けた現在の意匠になりました。こ

ちらも白石委員に小屋裏に上がってもらいましたが、やはり棟札は見つけれませんでした。先出の先代住職によると改修した棟梁はオチツルイチ（越智鶴一？）さんで、親戚に天理教の信者さんがいたため天理教の建物を多く手掛けており腕は確かだったが、何となく天理教風の意匠が感じられるとのこと。その棟梁の兄アオノキイチ（青野喜一？）さんにも逸話が残っており、大工の腕比べで槌を作ってそれを今治城の堀に投げ入れ、しばらく経ってから引き揚げて柄を引き抜いてみたところほぞの部分は全く濡れていなかったほど細工の腕前が良かったそうです。またツルイチさんの息子、ジロウさんは昭和46年の庫裡の改修を手掛けています。下の画像



▲客殿正面全景



▲客殿小屋組



▲客殿調査状況▲

は、屋根の勾配をならむ渡辺委員と記録する久保副委員長です。

■庫裡

客殿に隣接する形で、正面側より玄関、その左に8畳の事務所。廊下を挟んで先代住職の寝室があります。さらに右手に土間、納戸、台所が並び、水廻り（便所、浴室）のある廊下を介して奥の学寮と呼んでいる現住職の祖母が生活していた2階建ての住居があります。水回りの北側には鉄骨造の2階建て倉庫がありますが、モルタル壁もはげ落ち老朽化が進んでいます。学寮も祖母が世界されたのちは物置となり、こちらも老朽化が進んでいます。庫裡は大正時代の建物といわれていますが4度にわたる増改築を経て屋根形状が複雑に絡み合っており、雨漏りに悩まされている状況です。



▲庫裡（左端は客殿玄関）

■最後に

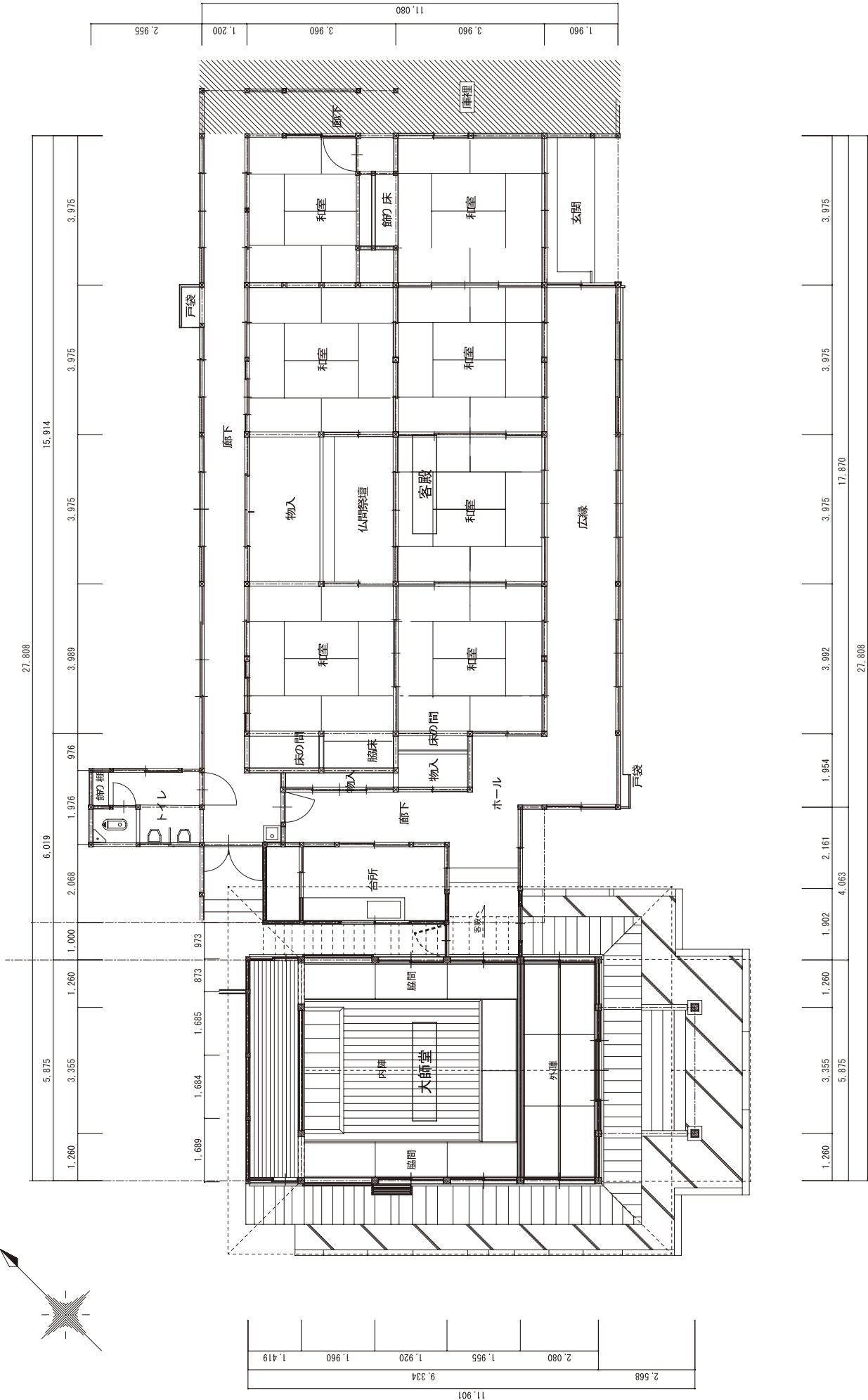
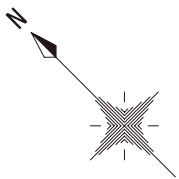
寺院の来歴は確かなので、その中の詳細な事柄を読み解くことで時代の中での位置づけも確立し文化財としての価値も決まってくるかと思いますが、建物そのものとしては改修をされてきた歴史のある建物だけに価値を確定させるのはなかなか難しいように思われました。しかし何よりも地元の由緒ある寺院であるので、時代に合わせた改修を施して後世まで使い続けて欲しいと思いました。今回私たちが作成した図面がその一助になれば幸いです。

調査年月日：令和6年12月21日(土)

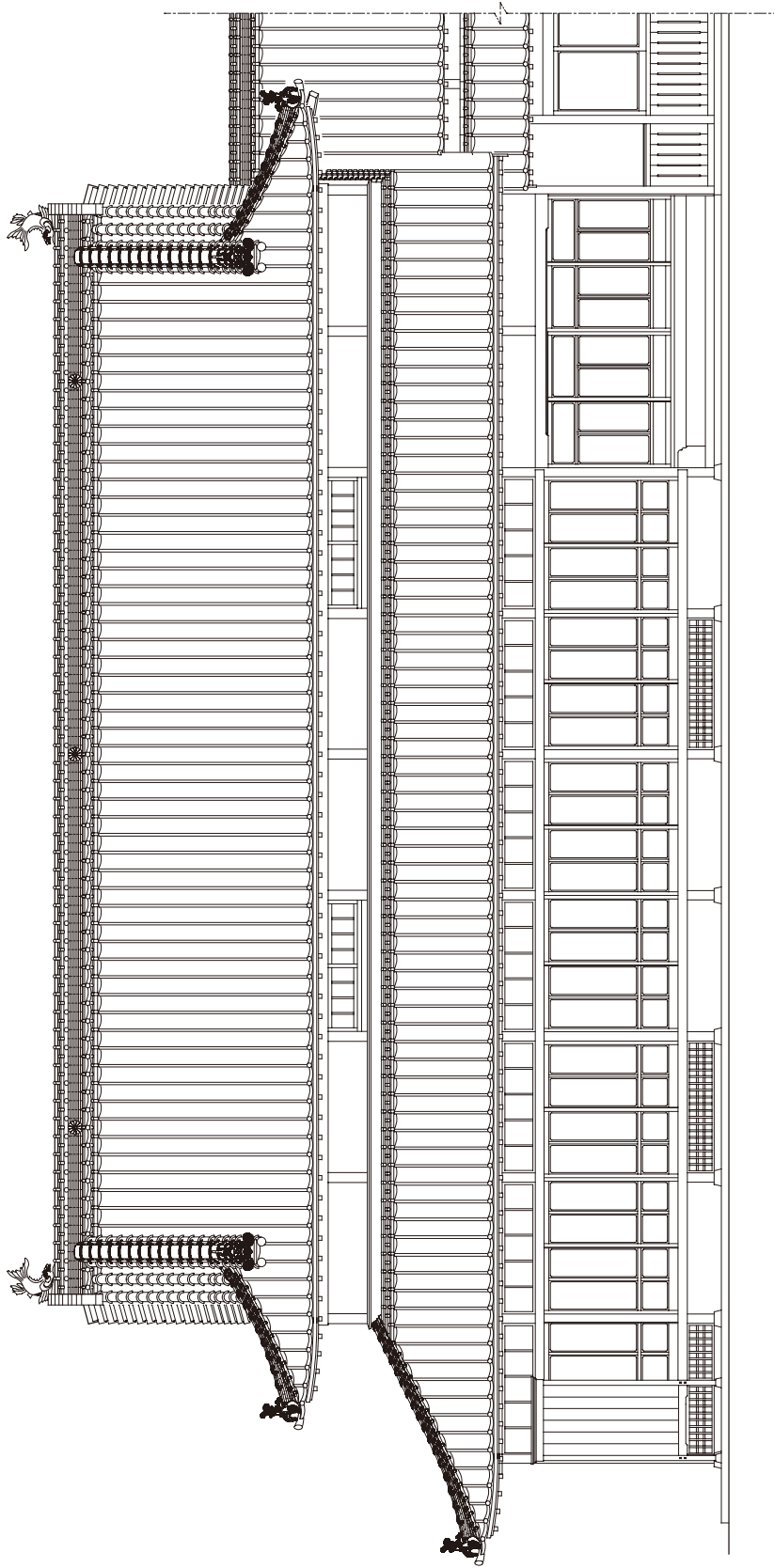
調査場所：無量寺（今治市朝倉上）

測量・図面作成：

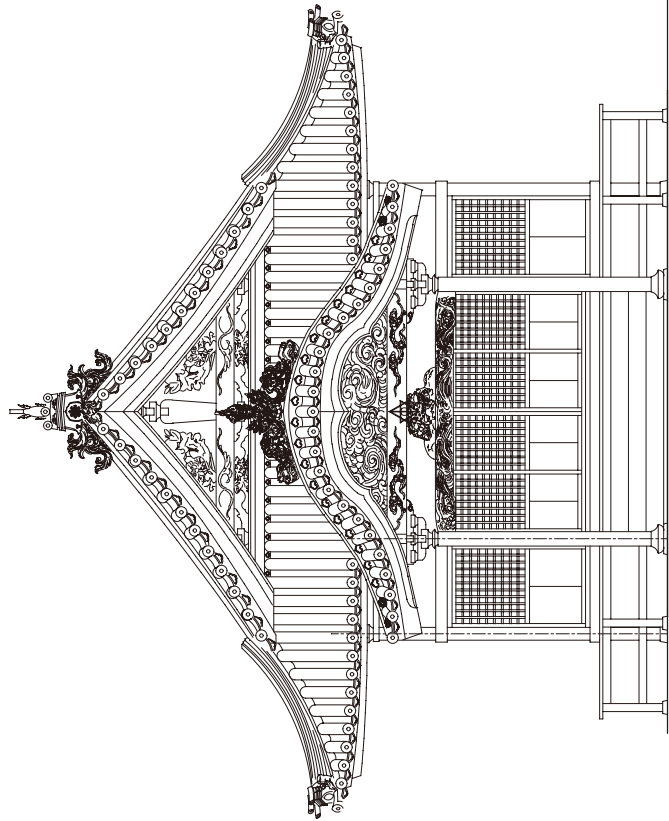
峰岡秀和、曾我部準、久保 孝、酒井慶治、白石耕平、菅野隆次、渡辺建文



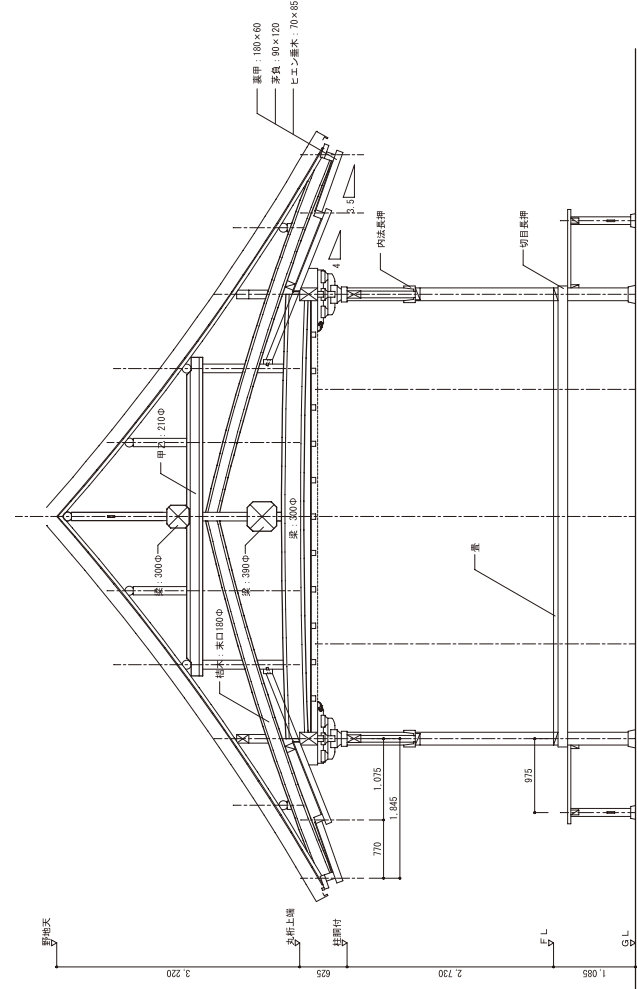
大師堂・客殿 現状平面図



客殿立面図



大師堂立面



大師堂断面



女性委員会主催見学会報告

『三津浜地区の良さを感じて…』

女性委員会委員 入船 安紀

日時：令和6年11月16日(土) 10:00~15:00

場所：三津浜地区（旧鈴木邸）

女性委員会主催見学会として、三津浜地区周辺散策を行いました。私は昨年三津浜地区に引っ越してきたので身近な存在となりましたが、なかなか三津浜地区をゆっくり散策する機会もなかったので、今回の見学会に参加して三津浜の良さを感じることができました。ガイドさんに案内していただきながら、三津周辺を見学しました。話によると、三津浜地区は第二次世界大戦時の空襲を免れた地域である為、築100年を超える歴史ある建造物が沢山残っているそうです。そして三津浜地区の活性化を目的として、空き家や古民家を再利用して「町屋バンク」を構築している町です。そのことにより、古民家が続く隣にリノベーションされたモダンな建物が建っていたりしています。

三津駅から続くまっすぐののびている商店街には、美味しい食べ物屋や雑貨屋、楽器店など様々な商店が並んでいます。三津浜地区一帯、色々な角度から色々な風景が楽しめました。登録有形文化財でもある「旧鈴木邸」「森家」「木村邸」「石崎汽船日本社ビル」「鯛や」など、歴史ある建造物が地域の方によって使用されながら大切に保存されていました。旧濱田医院は2014年に改修され2016年に複合施設として生まれ変わっており、1階には「クレロ」というフィナンシェ専門店、2階には「ミカンチョコ」という、ウィリアムモリス柄の生地で作られたハンドメイドバックを販売しているお店がありました。私設図書館のピクチャーライブラリー「くらら」は、無償で本がゆっくり読める癒しの空間になっています。2階の床は重みで歪みが出ていますが、初版からのジャンプや美術品・寺院の本・プラタモリなど…レアな本から様々なジャンルの本が沢山置いていました。明治45年に建てられた古民家をリノベーションして生まれ変わったシェアキッチン・フリースペース複合施設「うみねこ堂」は外部からの見学だけになりましたが、ガラス張りから見える木材は当時の古民家で使用していたものを再利用しています。

午後からは「ツクロイ」というヴィンテージ家具を取り扱っている家具修理店を見学しました。どれも品質が良く、見ていて欲しくなりました。自由に座ったりもできたので、座り心地の良いソファを堪能して帰りました。まだまだ見どころが沢山ある三津浜地区。是非、興味のある方は足を運んで昭和のレトロ感に癒されてはいかがでしょうか。



▲私設図書館「くらら」



▲うみねこ堂



▲ツクロイ

『三津浜地区見学会に参加して』

女性委員会委員 川崎 陽子

女性委員会の三津浜地区見学会に参加しました。当日は都合により途中、昼までの参加でしたが、そのなかで感じた事を報告したいと思います。三津浜は、子どもの頃から身近にある町でした。小学生の頃は、渡し舟に自転車と乗り込み、友達と図書館に行ったり、商店街に当時あったかわいい文房具を売っている店で買い物をしたりしていました。大人になってからはかかりつけの病院があったり、三津嶮島神社では節目節目でお参りをしています。近年の三津の賑わいや様々な取り組みはテレビや新聞等でももちろん知っていましたが、今回はガイドの方が説明してくださるという事で、楽しみにしていました。ガイドの岩神麻祐子さんは旧鈴木邸に住まわれていて、おはぎを扱うカフェをされている方です。岩神さんのガイドからは、三津が大好きな想いが伝わってきました。住んでいるからこそ分かる街角のレストランの情報や、普通に歩いていたら見過ごしそうな建築の意匠、生活感満載の路地を通りながらの散策は、本当に楽しかったです。

あたたかくなったら、また訪れたいと思います。



令和6年度 一級建築士 設計製図試験対策 実例見学会

四国中央支部 高橋 智洋

開催日：令和6年9月28日(土) 15時～17時
開催場所：四国中央医療福祉総合学院（専修学校）
参加者：見学7名
スタッフ：四国中央支部6名
資料協力：新企画設計(株)



今回の試験課題はなんと「大学」。初出題です！もちろん四国中央市には大学なんてありません。今年は中止でいいかなと考えていた所、支部長の「医療福祉学院なんかいいんじゃない」と一言。調べてみると専修学校ですが、規模・内容共に試験対策としては良さそうです。設計した新企画設計さんからも資料を頂ける事になり、学校からも快諾を頂き、今年も開催決定です。

当初は課題発表から1ヶ月後の8月31日で設定。17名と沢山の応募を頂きましたが、運悪く台風10号が直撃…、安全第一という事でやむなく延期となりました。



仕切り直しは9月28日、7名と少なくなりましたが試験直前の大事な時間。しっかりと説明させていただきます。

まず図面を基にアプローチや動線、ゾーニングなど建築計画について説明。学生が使いやすいように建物は基本に沿って設計されていたので、参加者も理解しやすかったのではないのでしょうか。

逆に構造計画については、教室のサイズなどから10m×10mのグリッドとなっていたため、勉強しているサイズからすると大きく感じたと思います。

あと試験勉強では飛ばし気味な、給排水や電気・空調などの系統についても確認しました。

一通りの説明が終わったらいよいよ見学です。館内には試験に出そうな「段床形式の教室」、「講堂」、「図書室」、「レストラン」などが揃っていますので、これだけでも参加した価値はあったかと思います。大空間の空調方式なども併せて説明しました。途中では吹抜けの縦穴区画の方法や、面積区画になっている講堂2階の見学窓、普段見る事のないPSやEPS、屋上のキュービクルについても見て頂きました。空調配管が上階に行くほど増えていくのは当たり前ですが、ちょっとした発見でした。

説明は予定通り2時間で終わり、後は役に立つ事を祈るばかりです。



そして合格発表の12月25日。

今年は学科の合格率が高かったためか、製図は過去5年間で最も厳しく全国平均で26.6%と狭き門でした。愛媛県だけで見ると合格者は24名、合格率31.6%と皆さん頑張っていたように思います。

合格された方もそうでなかった方も、ひとまずお疲れ様でした。

「高校生の建築甲子園」・「愛媛県内高校生建築競技設計」の作品展示

四国中央支部 高橋 智洋

開催日・開催場所：

四国中央市 紙まつり 令和6年7月27日

四国中央市 市民交流棟

令和6年12月15日～令和7年1月14日

四国中央市 ユーホール

令和7年1月15日～令和7年1月31日

四国中央市 川之江ふれあい交流センター

令和7年2月1日～令和7年2月15日

スタッフ：四国中央支部7名

協 賛：(一社)愛媛県建築士事務所協会

などと声を掛けられる事もあり、子供たちだけでなく幅広い世代にも響くのだなと感じました。来年度は市報でのお知らせなども活用して、広く認知して頂けるように進めたいと思います。



▲四国中央紙まつり（ブースの後ろへ展示）

以前は市内中学校において少年式での職業説明会や出前職業講座が開催されていましたが、コロナ禍を境に呼ばれることも少なくなり、子供たちへ建築のおもしろさを発信する機会が減ってきています。

他に発信する方法はないものかと考えていたところ、会報誌に「高校生の建築甲子園」事務所協会の会報誌にも「愛媛県内高校生建築競技設計」の記事を見つけました。これを展示して見てもらえば継続的に発信できるのではないか。建築士会、事務所協会に相談したところ、作品データはあるので提供は可能との事。さっそく準備にとりかかり、まずは紙まつりでの展示を行いました。

次は市内各所で発信できればと思い、市に相談したところ川之江・伊予三島・土居のそれぞれのコミュニティセンターでの展示が可能と情報を頂き、日程を調整して展示させて頂きました。

展示を見た方からは「もっとたくさんの作品を展示して欲しい」「設計に触れる機会が少ないので新鮮でした」



▲市民交流棟での展示



▲土居町ユーホールでの展示

瓦のおはなし会 ～「魅力を伝える努力」の大切さ～

今治支部青年委員会 今井 このみ

開催日：令和6年10月19日(土)

開催場所：かわら館

参加者：22名

共催：菊間町窯業協同組合

今治支部青年委員会では「つくり手の想いに触れるおはなし会～瓦編～」と題して、瓦のおはなし会と現場見学ツアーを開催しました。講師は瓦職人の道上大輔氏(大栄窯業株式会社 代表取締役) にお願ひしました。

昔ながらの家づくりの魅力を伝えたい

今年度から今治支部青年委員会では、日本の伝統的な家づくりの良さを再認識するイベントを始めました。今回はその第一弾の瓦編ということで講演会を開催し、その後古い瓦を再利用する形で改装中の古民家カフェ「な野屋」と、小泉製瓦の工場と店舗を見学させていただきました。



▲ 講演中の道上氏



▲ 講演に聞き入る参加者

私の個人的な「職人」のイメージと言えば、寡黙に黙って良い仕事をする…。しかし道上氏の講演は、世界各地の景観としての美しい屋根並みがある風景の紹介から始まり、瓦のもつ性質から屋根材としての強み、美しさ、瓦がモダンなデザインの建物に使われた事例の紹介、瓦職人として著名な建築家と関わってきたエピソードなど、本当にあらゆるアプローチで瓦の魅力を伝えるものでした。



▲ 瓦の採用事例 (時の納屋/香川県)



▲ な野屋前にて記念撮影

「魅力を伝える努力」の大切さ

私が道上氏の活動を拝見していて素晴らしいと思うのは、「瓦の魅力を伝える努力」に多くの時間と労力をかけて力を尽くされている点です。

残念なことに、現代では木組み、土壁、石場建て、瓦等で構成される「昔ながらの家づくり」をしたくても、多くの建築業者にとってすぐには実現不可能なほど、職人や建材業者が減少してしまっています。これ程までの衰退を招いた原因のひとつが、こうした家づくりの魅力を伝えきれなかったことにあるのではないかと考えています。

家づくりで最も大切なのは「施主がどのような家を望んでいるか」ですが、多くの施主は建築の専門家ではありませんから、建築業者からある程度の説明を受けながらプロジェクトを進めることとなります。その際に、本当は「長年の実感」として昔ながらの家づくり(瓦や土壁、木組みの家)が素晴らしいと感じていても、それを言葉にして上手く「伝える」ことができず、「安く早くできる」という断片的でわかりやすいメリットに流されてしまい、昔ながらの家づくりが衰退し続けてしまっているように感じられます。

瓦についても、初期費用の問題や重量による耐震性の不安という断片的な要素だけを見て、安易に選択肢から外されがちのように感じます。しかし瓦には、圧倒的な耐久性と、瓦自体はメンテナンスフリーという大きな強みがある上、瓦にしか出せない風情や親近感、街並みとしての美しい景色を作る力があり、それが住む人の「感性としての豊かさ」につながることなど、デメリットを補って余りあるメリットがあるという見方も可能です。そうした総合的なイメージが伝われば、「瓦屋根の家を建てたい!」という方も増えてくるのではないかと考えています。

魅力を伝えるための「学び」

こうした魅力を伝えるには正しい知識を身に付けておく必要があります。経験豊富な職人の方から直接教えていただける機会とはとても貴重です。道上氏の講演を聞くことは私にとって二度目でしたが、複数回に渡ってこうした機会を持つメリットを実感しています。



▲ 小泉製瓦の工場



▲ 懇親会の様子

今治支部青年委員会では来年以降も、こうした昔ながらの家づくりに関するイベントを企画しています。

ご興味を持たれた方はぜひご参加ください。お待ちしております。

活性化委員会主催 研修バスツアーinかがわ2024

松山支部 中尾 忍

11月23日(土)、活性化委員会主催の研修バスツアーinかがわ2024が開催され、会員、非会員含め23名が参加しました。今回は香川県に近年整備された大串半島活性化施設、「時の納屋」(設計:堀部安嗣氏)、屋島山交流施設「やしまーる」(SUO+Style-A設計共同企業体:設計者:周防貴之氏)の他、昼食時に登録有形文化財に指定されている讃岐牟礼の里「郷屋敷」、今年開館25周年を迎えた「イサム・ノグチ庭園美術館」、合計4か所を参加者の皆様と一緒に訪れました。



▲時の納屋

最初に訪れた「時の納屋」は、今年の5月18日に講演会をしてくださった堀部安嗣氏の作品になります。天候にも恵まれ、短い時間でしたが大串半島の地形、自然環境、瀬戸内海の風景を活かした設計を体感できた一時でした。



▲郷屋敷

次に訪れたのが、昼食時の休憩場所でもあった讃岐牟礼の里「郷屋敷」でした。登録有形文化財で、店舗として利用されている建造物ですが、広い敷地内の前庭、中庭を眺めながら店内で食事が楽しめる施設で、文化財の活用という視点で見学する建物としては良い参考になるのではないかと思います。

3番目に訪れたのが、イサム・ノグチ庭園美術館でした。今年、イサム・ノグチ生誕120年、美術館開館25周年ということで、メモリアルなタイミングで訪れるこ

とことができました。イサム・ノグチが滞在中に住んでいた江戸時代の住宅は別の場所から移築されたものでしたが、あかりシリーズの照明と土間、庭などの空間が当時のまま展示されていました。作品名「エナジーボイド」が展示されている建物はもともと愛媛の酒蔵の建物を移築したもので、開口部や外壁の仕上げ、2階への階段の位置は展示空間のためにイサム・ノグチが手を加えて改修されたそうです。残念ながら撮影は不可ということでしたので、ご興味のある方はイサム・ノグチ庭園美術館へ予約後に訪問してみてください。

最後に訪れたのが屋島山に近年整備された回廊型の交流施設「やしまーる」です。建物の特徴は曲線を多用した鉄骨造の建築で庵治石を屋根瓦に使用し、ガラス張りで中庭と瀬戸内海の眺望を一度に楽しめる回廊型のユニークな建築でした。交流施設としての機能がコンパクトにまとまっており、隣の改修整備された飲食店と関連した計画で訪問者の集客に効果を発揮していました。今回、企画担当だった活性化委員会の大家様、お忙しいところご参加頂きました松山支部長の花岡様、他参加者の皆様、お疲れ様でした。とても充実した内容の研修ツアーでした。ありがとうございました。また、普段お会いする機会の少ない若い会員候補の皆様、会員の皆様とも交流ができて、良い交流の機会にもなったのではないかと思います。また次年度も研修ツアーを通じて交流の機会が持てたらと思っています。

㈱日創設計 坂本 龍城

今回の研修ツアーに参加させていただき、建築や芸術の魅力を感じるとともに、愛媛県建築士会松山支部の方々の温かさに触れる事ができました。4か所全てが初めて訪れる場所で、日常では味わえない雰囲気の中で伝統的な建築物と芸術作品から多くの事を学ぶとともに、心身のリフレッシュができました。なにかを学び、吸収しようと臨んだ研修でしたが、結果的には日頃の疲れも癒す体験にもなったことで、建築や芸術の力を体感すると同時に自分自身の建築への愛情を再確認することができた貴重な経験になったと思います。私は研修ツアーの参加が初めてということもあり不安もありましたが、松山支部のみなさんにとっても温かく声をかけていただき、楽しくリラックスして研修ツアーに参加することができました。今回の研修ツアーの実行に尽力していただいた方々をはじめ、参加した方々、本当にありがとうございました。



▲やしまーる

令和7年度「地域貢献活動基金助成対象事業」の募集について 〔建築士会は、まちづくり活動を支援します。〕

公益社団法人愛媛県建築士会は、会員の皆さんが地域の人々と共に行う社会貢献事業や建築士会の内部組織（研究会等）が実施する地域貢献活動としての事業を応援します。

すでに活動をしている方も、これから何か始めようという方も、一定の条件を満たせば事業に助成金を活用することができます。

1. 助成の対象事業の内容

会員が参画する以下のテーマに沿った営利を目的としない地域貢献活動が対象です。

- (1) 地域のまちづくり
- (2) 景観の保全
- (3) 居住環境の保全・整備
- (4) 自然環境の保全・整備
- (5) 福祉環境の整備
- (6) 地域住宅づくり
- (7) 地域防災づくり
- (8) 歴史的遺産の再生と活用
- (9) その他、地域活性化、社会サービス

2. 助成の対象

- ・建築士会会員が参画する地域貢献活動に対する活動助成
- ・国、地方公共団体から、建築士会に対しての委託事業、人材派遣に関連して進められる地域貢献活動に対する活動助成
- ・地域貢献団体助成事業運営委員会が助成を必要と認めた地域貢献活動に対する活動助成

3. 助成金

- ・1件当たり限度額50万円とし、助成率は事業活動費の3分の2とします。
(継続的事業の場合は3年を限度とします)

7. 助成事業一覧について (事例)

年度	事業名		助成額	備考
平成30年	松山市	建築士による木造住宅の耐震化を促進する会	20万円	2年目
	松山市	女性と防災の会	5万円	1年目
令和1年	松山市	建築士による木造住宅の耐震化を促進する会	20万円	3年目
	松山市	女性と防災の会	8万円	2年目
令和6年	松山市	宮内家住宅保存活用調査	50万円	単年

4. 応募手続き

①助成申請者は

- ・申請時に組織内に建築士会会員として継続して在籍が3年以上の者が複数参画している活動団体の代表者。
- ・建築士会の内部組織（研究会等）の代表者で上記2の助成事業を行おうとする者。

②助成申請書は規定の申請書により申請してください。 (申請書はHPからダウンロードできます)

<http://www.ehime-shikai.com/other/6734.html>

5. 応募期間

令和7年4月1日～5月30日まで（事前問い合わせは随時受け付けます。）

※応募期間前であっても、仮受付をしますので、お申し出ください。

6. 助成対象事業の決定と助成金交付等について

- ・助成対象事業の趣旨に沿った事業かどうかを基準に「愛媛県建築士会地域貢献団体助成事業運営委員会」が審査します。助成額の決定は、申請書受理後60日以内に書面にて通知します。
- ・事業の実施期間は、助成額決定日から令和8年3月31日の間に実施される活動を基本とします。
- ・助成金は、交付申請者に対して、助成金交付決定通知後の助成金請求に基づき交付します。
- ・交付申請者には、活動の内容・助成金の管理・報告書の提出に責任を持っていただきます。

提出及び問合せ先：公益社団法人愛媛県建築士会

〒790-0003 松山市二番町4-1-5 建築士会館2階

TEL：089-945-6100 FAX：089-948-0061 E-mail：lee04603@nifty.ne.jp

あなたの原稿をお待ちしています。

公益社団法人として、異業種や全ての皆様から建築士会の枠を超えて原稿を広く募集して広く購買して頂くようにしています。是非、寄稿して頂きますようお願い致します。本年度は年6回発行となります。(尚、営業的色彩の濃いものにつきましては、掲載されない場合もありますので、ご了承ください。)

「いしづち」の次号の原稿締切日

令和7年 5月号 (164号) 令和7年3月27日(木)

※校正印刷の関係で締切延長の最終期限は一週間後の木曜日とします。

※1ページ写真込みで2150文字(25文字×43行×横2段)のWORD様式を事務局で用意していますのでご活用ください。

写真は1ページ当たり3枚程度まで題名を付けて添付してください。

また宜しければ投稿者の写真(免許写真程度の顔写真)を添付してください。

会員の皆様のご参加をお待ちしております。また記事等についてのご意見・ご感想もお寄せください。

(尚、投稿された原稿につきましては、要旨を変えない程度の若干の訂正等を加えることがあるかもしれませんので予めご了承ください。)

この誌面を通じて、会員の方々、そして一般の方々にも、建築についての対話等の輪が広がればと願っています。
情報・広報委員会

読者の声欄

「いしづち」に関するご意見・ご提案などをお寄せください。お待ちしております。

「いしづち」編集委員会(士会事務局内)宛 FAX 089-948-0061

編集後記

建築士会会員で建築業をされている方、賛助会員で設備業をされている方とお話をする機会があり、地域行政が地元企業を育てることの大事さを感じたのでお話をしようと思います。

お話をしていた地元企業の皆さんが行政に不満を感じていることがあります。それは、地元企業に仕事が回らないことです。

地元で仕事が回らない理由の例として、設計金額が大きく地元企業が入札に参加できないことがある。また、入札に参加しても評価型入札制度で、実績のある大手企業の評価が高くなり、地元企業が頑張って入札金額を一番低くしても評価点の高い大手企業が落札することがある。と言われていました。

以前より地元企業が行える工事が少なくなり地元企業に優しくないのです。

設計金額が大きくなる事業であれば、分割すれば地元企業が入札に参加できる場合もあります。また、国の評価型入札制度が地方行政に合っているは思えません。どちらかと言うと実績を重んじるのではなく、地元企業だから評価点を上げるべきだと思うほどです。

今のままでは地元企業は減っていく一方で、跡取りも育たない状態です。

最近では、南海トラフ巨大地震が発生する可能性が高まり、地元企業と災害発生時の協力提携を結ぶ行政が多いですが、これほど地域行政は地元の企業に優しくないにも関わらず、都合の良い時だけ、災害時の時だけ、地元企業に頼っています。

最終的に地元を守るのは地元の企業です。これからは地域行政の役割として、地元企業に仕事が回る様にして、地元企業を元気にし、育てて地元企業を増やしていく、その様な制度を作る必要があると思います。

〈いしづち〉2025/3

令和7年3月発行

発行人 会長 尾藤淳一

発行所 公益社団法人 愛媛県建築士会

〒790-0002 松山市二番町四丁目1-5 愛媛県建築士会館2F

TEL(089)945-6100 FAX(089)948-0061 <http://www.ehime-shikai.com>

印刷所 アマノ印刷有限会社

情報・広報委員会・広報委員

委員長/大平 将司 副委員長/渡邊 道彦

編集委員/池川 佳代 河合 優志 西岡 亜有美 西森 勉